人間発達科学部紀要　第10巻第1号：79－88（２０１５）

博物館において障害児者の生涯学習の機会を保障するための合理的配慮のあり方

―情報保障の観点で特色ある取り組みをおこなう3つの博物館の事例から―

菊池 加奈*・水内 豊和

Reasonable Accommodation at Museums for Individual with Disabilities to Guarantee the Opportunity of Lifelong Learning : The Case Reports

Kana KIKUCHI & Toyokazu MIZUUCHI

摘　要

わが国における障害児者の生涯学習に関することは，「障害者の権利に関する条約第24条教育」を受け，障害児者が他の者との平等を基礎として，生涯学習を享受することができることを確保するため，合理的配慮が障害児者に提供されることが求められる。しかしながら，博物館学芸員は，その専門性として障害の科学的理解にまで至っておらず，どのような配慮をおこなってよいかわからないといった現状がある。そこで，筆者が平成24年度に実施した全国の博物館を対象とした「博物館における障害児者対応についての実態調査」の結果から，特色のある障害児者への対応をおこなっている博物館を抽出し，3館を対象に視察調査を実施した。3館それぞれで，「特色のある展示」，「ユニバーサル・ミュージアムの構想」，「視覚障害，聴覚障害，知的・発達障害などの障害種別におこなわれている配慮」といった観点において，独自の展示や配慮をおこなっていることが明らかとなった。

キーワード：障害者，生涯学習，博物館，学芸員，「合理的配慮」
keywords：Individual with disabilities, lifelong learning, museum, curator, & "Reasonable Accomodation"

Ⅰ．はじめに

2006年に国連総会において採択され，日本が2014年に批准した「障害者の権利に関する条約第24条教育」においては，「障害者が，差別なしに，かつ，他の者との平等を基礎として，成人教育及び生涯学習を享受することができることを確保する。このため，合理的配慮が障害者に提供されることを確保する」とあるように，障害児者の生涯学習の機会均等が示されている。

約10年前の調査である「誰にもやさしい博物館づくり事業バリアフリーのために」（財団法人日本博物館協会，2005）においては，点字ブロックや多目的トイレの設置などの物理的環境の整備の必要性が述べられている。しかしながら，ふれることのできる展示を設けたり，視覚以外のさまざまな体験を展示に取り入れたりしている館は2割程度にとどまっており，各館の支援に対する取り組みが明確ではなく，障害児者にとって十分に展示を楽しめる環境とは言い難いようである。このように，物理的環境の整備にとどまっていては，さまざまなニーズのある障害児者にとって，生涯学習の観点からも博物館の利用がすべての人に拓かれているとは言い難いであろう。生涯学習施設の一つである博物館では，障害児者の興味関心の拡充のために，物理的な配慮の必要性に加え，展示の解説を望む人や，展示に関するワークショップなどの人とのかかわりの中で展示を楽しむことを望む人など，さまざまなニーズがある。障害児者が博物館に来館した際の対応については，来館者のニーズを把握し，博物館が来館者の求める知識や楽しみを享受する場である必要性（筆者，印刷中）が指摘されている。また，障害種の中でもとりわけ知的障害や発達障害のある来館者については，「発達障害をもつ人たちの多くは，芸術分野と学習に関して文化的なニードをもっている」（駒見，1995）といわれている。

さらに，博物館を利用する際には障害の有無にかかわらず，来館者が気がかりや不安，心配を抱くこ

*北陸ビジネス福祉専門学校

とがあることを考慮する必要がある（駒見，1998）。たとえば，大学生に博物館や美術館に対して抱く印象を聞いた調査（駒見，2003）では，「静かな場所，暗い感じ，日常生活から隔離された場所」といったものが挙げられている。自閉症など感覚過敏等のある知的障害児者，発達障害児者（以下，知的・発達障害児者とする）にとって，上記のような環境の中で鑑賞することは，知的・発達障害児者の生涯学習や興味関心の拡充の視点からすれば，博物館利用の困難さの一因となり，博物館を訪れにくい現状があると推察される。

発達障害児者の博物館利用の配慮には，正しい理解と共感を築いたうえで，ソフト面での対応が重要である（駒見，1997）ことがいわれている。一方で，筆者が2014年に全国の博物館を対象におこなったアンケート調査の結果からわかるように，博物館に障害児者が来館した際に，博物館学芸員側がおこなっている配慮の水準はさまざまで，多くの博物館学芸員は，障害児者に対してどのような配慮をおこなってよいのかがわからないといった現状がある（筆者，印刷中）。こうした来館者のニーズを考慮した配慮をおこなう博物館の具体的な知見を得ることは，日本における博物館でのさまざまな鑑賞方法のあり方を考える上で大変有意義なものであると考える。

そこで本研究では，実際に博物館でおこなわれている，障害児者が博物館に来館した際の配慮の内容やさまざまなニーズを踏まえた企画展示やワークショップの様子を視察し，その配慮の内容や鑑賞方法の工夫，学芸員が展示をつくる際に心掛けていることをインタビュー調査し，地域生活を送る障害児者にとって，博物館がより充実した生涯学習や興味関心の拡充の場となるために，今後博物館で必要とされる配慮の視点を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 対象

視察調査の対象となる博物館とインタビュー調査の対象者は，以下の通りである。

□吹田市立博物館（大阪府吹田市）
学芸員　五月女賢司氏
□大学共同利用機関法人 人間文化研究機構　国立民族学博物館（大阪府吹田市）
准教授　広瀬浩二郎氏
□The Metropolitan Museum of Art（アメリカ合衆国ニューヨーク州）
エデュケーター　Rebecca McGinnis 氏

対象の選定にあたっては，筆者の全国の博物館（動物園，水族館，植物園を除いた施設）を対象に実施したアンケート調査（筆者，印刷中）の回答を参考に，以下の条件 1 を満たし，条件 2 を概ね満たす博物館を　「障害児者に対する特色ある合理的配慮をおこなっている館」として対象の候補とした。その上で，候補となったいくつかの博物館学芸員に対し，研究の趣旨説明と視察調査の依頼をおこなった。依頼に承諾した以上 3 つの博物館を視察調査の対象とする。

条件 1　障害児者の来館時の配慮や工夫を専門的におこなったり研究したりしている学芸員のいる博物館
条件 2　視覚以外の方法による鑑賞方法を来館者に対して提供している博物館

なお，視察調査は，平成26年 5月～12月に実施した。

障害のある来館者への対応や配慮をおこなっている博物館学芸員を訪問し，障害児者が博物館に来館した際の配慮の内容やさまざまなニーズを踏まえた企画展示やワークショップの様子を視察する。さらにその配慮の内容や鑑賞方法の工夫，学芸員が展示をつくる際に心掛けていることをたずねるインタビュー調査を実施する。なお，視察やインタビュー調査の際には，「特色のある展示」，「ユニバーサル・ミュージアムの構想」，「視覚障害，聴覚障害，知的・発達障害などの障害種別におこなわれている配慮」といった視点で視察することとした。

Ⅲ．結果と考察

1. 吹田市立博物館

（1）特色のある展示について

吹田市立博物館では，2006年度より，「実験展示　さわる－五感の挑戦Ⅰ－」と称し，展示物をさわることを鑑賞方法の一つとする展示を実施している。この展示が考案された背景には，2004年から2012年まで吹田市立博物館の館長を務めた小山修三氏の存在がある。吹田市立博物館は，2004年まで資料の収集，保存に重きを置いており，展示に関しては，展示品のほとんどをガラスケースに入れ，みて鑑賞

するといった方法をとっていた。小山氏は，展示こそが博物館の使命であると考え，「見せる」を強調したい（小山，2012）との考えから，「実験展示さわる－五感の挑戦Ⅰ－」を企画した。その際，国立民族学博物館で先駆けておこなわれた，さわることを鑑賞方法の一つとした展示を実施した担当者やボランティアをアドバイザーに，イベントの企画をおこなった。この展示は，この後2010年度まで継続し，「実験展示　さわる－五感の挑戦Ⅴ－」まで展開されている。その後，「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」という名称に変更し，2014年度まで毎年おこなわれている。

2006年度の展示では，仏像レプリカなどをさわる展示であった。それ以降，吹田市のニュータウンに関連する資料や和楽器（琴や琵琶，尺八など），仏像のレプリカなど，さまざまな展示物をさわることのできる展示となった。この展示では，展示室にあるすべてのものをさわることができ，来館者は，和楽器であれば演奏することができる。また，ニュータウン時代の民衆の暮らした部屋が復元されており，テープライターや簡易型風呂を写真に撮影することも可能である。

この展示がおこなわれる背景について，学芸員の五月女氏は「さわる展示の面白さは，実際に手でふれることで，モノの質感や形，大きさなどを触覚でとらえ，そこから複合的な情報や感動を得ることができる」ことと述べている。自分自身の手を動かすことで，過去を生きた人がその展示物（以下「モノ」とする）が創られた背景を想像し，そのモノを使用した人々の文化的背景や実際の使い方を実感し，そのモノが博物館に収蔵された際に，学芸員がおこなうモノの価値づけや保存，伝達などの様子を感じ，追体験することができると考えられる。さらに，このような博物館での体験を通して，来館者は，自らが居住する地域の歴史をより身近に，深く感じることができるなど，みるだけでは得られない感性を磨くきっかけとなるといえる。

また，地方の博物館でこのような展示をおこなうには，博物館現場と協力した大学の研究者や，人材や資源を使用して実践的な研究をできる環境がある国立博物館などが先導的な役割を果たす必要があるといえよう。

(2) 障害のある来館者に対する配慮について

博物館における配慮については，知的・発達障害児者に特化した特別な配慮はおこなわれていない。その背景には，学芸員にとって，知的・発達障害児者が博物館に訪れた際にあると考えられる困りごとが想定しにくいこと，知的・発達障害児者が博物館を訪れたときにあると考えられる困りごとが考えられたとしても，その配慮が一般来館者やその他の障害のある来館者にとって有効であるかの判断がつかないために，実施するという判断に至らないことがあると考えられる。一方で展示環境の水準を，誰かに合わせることが，他の来館者にとっても有効な展示となると考えて実施されたものが成功することもある。個々の博物館が展示したいものや，目指す博物館像の違いを考慮しながら配慮をおこなうことが必要であると考えられる。

2. 大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立民族学博物館

(1) 特色のある展示について

国立民族学博物館では，2001年より，広報誌「月刊みんぱく」を音訳して全国に配布する取り組みがおこなわれている。この取り組みは，ユニバーサル・ミュージアムがいわれ始めた時代背景や，視覚障害児者への博物館での対応として発展してきた。2006年におこなわれた「さわる文字，さわる世界触文化が創りだすユニバーサル・ミュージアム」という展示は，さまざまなモノに直接さわることで，触覚のおもしろさに迫ることが目的とされた。この展示がきっかけとなり，視覚障害児者のためではなく，皆が楽しめる展覧会を目指すという方針から，展示物をさわる体験をおこなうことで，視覚障害のない人にも，さわることでしか得られないことを実感する機会を提供し始めた。

これらの背景から，2009年には，点字の考案者であるルイ・ブライユの生誕200年を記念して「点天展」が企画された。点字器や点字タイプライターなどのさまざまな展示物をさわる展示が取り入れられたが，特別展示であったため，展示期間が終了すると，さわる展示が皆無になってしまうことから，常設展示としてさわる展示を始めた。国立民族学博物館では，展示物をさわることで，モノの「形状，質感，機能」を知ることができるとしている。これ

らの展示物は，視覚障害児者だけでなく，視覚障害のない来館者にとっても，展示物をさわってみなければ，実感しにくいものである。

一方で，さわる展示は資料の性質に頼る部分がある。国立民族学博物館で扱う資料は，民族資料（祭祀で使用するお面や各民族の生活用品，楽器など）であるため，来館者がさわったときに，凹凸や素材を知ることができ，形状を感じやすいといえる。しかしながら，絵画は実物をさわることは難しく，凹凸も少ない場合が多いために，形状や質感を実感しづらい。民族資料のような，ある程度の数が確保されており，モノのあるがままの姿をみられるものであることが必要であろう。課題としては，過去の時代においてはさわることができたものが，現代では貴重な博物館資料とされ，さわることが難しくなってきている資料も存在することである。すべての資料をさわることで鑑賞するのは，難しいといえるだろう。

(2) 常設展「世界をさわる」について

国立民族学博物館で常設展示としておこなわれているのが，「世界をさわる」である。これは，展示のイントロダクションとして実施されている。モノを「じっくりさわる」，「見てさわる」，「見ないでさわる」の 3 段階に分かれており，木と石，金属というように，それぞれに素材の異なるモノが展示されている。「じっくりさわる」段階では，資料の形や手ざわりを確認し，優しくさわることで，資料をつくった人々とその文化や社会へ思いを馳せることが目的となっている。「見てさわる」段階では，キャプションや解説を読みながら，全体の形，細部の構造，内側と外側との関係などを目と手でしっかり確かめることで，資料がどういった素材から，どのようにつくられているかを考える機会となっている。「見ないでさわる」段階では，さわることだけで，資料の形や細部の様子を把握するという構成となっている。この展示を通し，さわることのおもしろさや気づきを得たり，みることができなくとも，想像したりすることでモノを感じられる場となっている。

(3) みんぱくミュージアムパートナーズについて

国立民族学博物館では，みんぱくミュージアムパートナーズ（以下，MMP とする）と呼ばれる活動を2005年度から実施している。これは，博物館のボランティアが視覚障害のある来館者に対して，展示の解説や案内をおこなったり，「点字体験ワークショップ」を運営したりするものである。展示解説の原稿は，MMP に所属するボランティアが国立民族学博物館の研究員から助言を受け，作成している。その原稿をもとに，来館者とボランティアが展示をまわり，対話を繰り返しながら展示を楽しむことがこの取り組みの目的となっている。国立民族学博物館では，アメリカ大陸やオセアニア大陸などの各国の文化に関する資料を展示しており，展示解説では展示地域の特徴や展示内容の概要を説明後，さわったり音やにおいがしたりする展示品を中心に解説がおこなわれている。「点字体験ワークショップ」では，簡易点字器を用いて自分の名前を点字で打ったり，点字表記の文章を読んだりする。点字を読むクイズや，展示物をみずにさわるなどの活動がある。

さらに，特別展示や企画展示の際に，視覚障害のある来館者への案内や「きり絵ワークショップ」などを不定期におこなっている。「きり絵ワークショップ」とは，アイヌの文様を切り絵で作成するというイベントである。

これらの取り組みの他にも，子どもを対象とした「あそびの広場」では，玩具や楽器を手作りできる企画の実施，あやとりや石けりなどの日本の昔の遊びや世界の遊びを体験することができる企画がおこなわれている。季節にちなんだ干支などの作品を折り紙でつくるワークショップや，外国の絵本や紙芝居を，外国の楽器での演奏を交えて読み聞かせをおこなう「絵本とおはなし」の取り組みがある。さらに，民族資料を専門とする博物館の特色をいかし，各大陸の文化を体験できるイベントがおこなわれている。

小学校を対象とした「わくわく体験inみんぱく」は，楽器や衣装の体験，生活や遊びの体験などの体験活動を通じて外国の文化を学んだり多文化共生を考えたりするもので，児童生徒25名を一班とし，4つのセクションを各20分間ずつ体験するプログラムである。

これらの取り組みから，視覚障害のある来館者が展示を楽しめるような取り組みやボランティアなどの資源を活用した工夫や配慮をおこなっていることが明らかとなった。

（4）誰もが楽しめるユニバーサル・ミュージアムの構想について

国立民族学博物館では，視覚障害や聴覚障害，知的・発達障害など，障害種に特化した特別な配慮はおこなわれていない。職員の広瀬氏いわく，近代化の中で障害が細分化され，それぞれの障害が全く異なる属性をもってきたが，国立民族学博物館では，障害といった概念に縛られることなく，展示を提供したいといった希望があるという。とりわけ触覚は全身に存在し，手でさわることは，手を伸ばして情報を得に行くという能動的な動きであるといえる。障害種を細分化するといった近代化の中で，人間観や世界観を変えることを，さわるという方法が可能にしているといえよう。

3. The Metropolitan Museum of Art

（1）特色のある展示について

The Metropolitan Museum of Art（以下,「メトロポリタン美術館」とする）では，来館者に向けたガイドブックとして，「Access Information」,「Access Calendar」といった来館者全体に関する情報に続き，全盲，弱視などの来館者への配慮，難聴や聴覚障害のある来館者への配慮，認知症患者やその介助者についての配慮，自閉症スペクトラム障害や学習障害などの発達障害のある来館者への配慮，障害のある来館者の団体への配慮など，さまざまな来館者に対する配慮やワークショップなどのプログラムについて詳細に書かれている。また,「Access Information」や「Access Calendar」に対応した内容で,「For Visitors Who Are Blind or Partially Sighted」,「Discoveries」,「Met Escapes」といった対象者別のリーフレットが発行されている。加えて,「Access Map」とよばれる美術館内のエリアガイドが用意されており，美術館内のどの場所でどのようなサービスを受けることができるのかが，サインを用いて説明されている。「Access Map」は博物館のメインエントランスにある受付で受け取ることができる。以下，メトロポリタン美術館が障害のある来館者に対しておこなっている配慮やワークショップなどの取り組みについて，詳細に述べる。

（2）全来館者に対しておこなわれているプログラムについて

「!Festa!」と呼ばれる，ラテンアメリカの祭祀を体験できるイベントや,「Friday Evening Gallery Event」というハロウィーンなどの行事にちなんだイベントがおこなわれている。「!Festa!」では，展示作品を探したり，作品についての話やパフォーマンスを楽しんだりする活動をおこなう。これらのプログラムは，無料で体験することができ，予約も不要である。

（3）全盲，弱視などの来館者への配慮について

「Access Information」では，全盲や弱視などの来館者に対しておこなっている配慮について受付やそれぞれの展示室にて，大きな文字サイズで印刷されたパンフレットを用意している。パンフレットの内容は，展示についてのもの，その日一日に美術館でおこなわれるイベントについて書かれたものがある。さらに，ヘッドホンタイプの音声ガイドを用意している。これは，美術館の玄関ホールで借りることができ，複数の言語の音声がある。複数の企画展示に対応しており，音声ガイドの操作方法は，大きな文字で印刷されている。視覚障害のある来館者は無料で使用することができ，メトロポリタン美術館では盲導犬を歓迎している。

「Picture This!」と呼ばれるプログラムは，絵画をさわる，エデュケーター（博物館において，学芸員の中でもとくに教育普及活動をおこなう専門家。展示解説や各種の教育プログラムなどに携わり，来館者の学習を支援する者）から説明を受けるなどの活動を通して，絵画の詳細な部分を感じながら，鑑賞するプログラムである。「Seeing Through Drawing」は，メトロポリタン美術館の収蔵品や革新的な技術で描かれた絵について，その作品に使用されている材料の説明を受けながら鑑賞するというワークショップである。「Picture This!」にはファミリープログラムが設けられており，5歳から17歳までの子どもとその友人や家族がともにプログラムに参加することができる。このプログラムは，社会的スキルや独立して生活するスキル，レクリエーションや余暇のスキルなど，その回の中心となるカリキュラムや複数のスキルにまたがって，エデュケーターが全盲や弱視などの来館者の支援をおこなっている。上記のプログラムは，予約が必要であり，無料で参加できる。

「Self-Guided Touch Tour」は，古代エジプトに関する展示をさわりながら鑑賞し，エジプトの画廊をまわったり，大きな文字で印刷されたガイドブックをもとに彫刻の説明を受けたりするプログラムである。ガイドブックはメインエントランスで受け取ることができる。展示室の彫刻について説明を受けたい場合は，メインエントランスで音声ガイドを借りることが可能であり，全盲及び弱視の来館者は無料である。このプログラムは，予約が不要である。

また，「Guided Touch Tour」と呼ばれるプログラムは，古代エジプトのギャラリーをまわり，メトロポリタン美術館が所蔵する有名なファラオや神などの彫刻をさわることができる。エデュケーターとともに鑑賞するが，来館者が「Self-Guided Touch Tour」のように個人でまわることも可能である。

「Touch Collection」は，作品をさわって鑑賞するプログラムで，1 世紀のローマの大理石から20世紀のエスキモーの親子の彫刻まで，さまざまな展示物をさわることができる。全盲及び弱視などの来館者が年齢制限なく，個人またはグループで参加することができる。

「Verbal Imaging Tours」は，作品の解説を受けながら，展示や常設展示の作品をまわるツアーである。

さらに，学校や機関に対しておこなう「School Group Tours」がある。このプログラムは，全盲または弱視などの児童，生徒が作品をさわる体験をしながら美術館をまわるというものである。プログラムの申し込みはメトロポリタン美術館のホームページからすることができる。その際に，美術館をまわるプログラムを実施するときに必要な配慮を学校側に提示することを求めている。「School Group Tours」についての質問や疑問は，電話で確認することができる。上記の 4 つのプログラムは，予約が必要だが，無料で参加できる。

パンフレットでは，「Art and the Alphabet」という本を紹介している。この本では，メトロポリタン美術館の所蔵する名作の抜粋をアルファベット順に紹介している。無色透明な紫外線硬化樹脂インクの点字や立体触図が絵画の輪郭や平面部分などに用いられ，必要に応じて，絵画の一部が拡大されているものである。

メトロポリタン美術館では，この本を家族や友人，教師と，視覚障害のある子どもが一緒にみること推奨している。この本についての情報は，メインエントランスで得ることができる。

（4）聴覚障害のある来館者への配慮について

メトロポリタン美術館では，難聴や聴覚障害などのある来館者に対して，音声ガイドを用意している。これは，首からかけて使用し，多くの展示のガイドがあり，複数の言語に対応している。声量を調節することができ，難聴や聴覚障害などのある来館者は，無料で借りることができる。また，「Real-time captioning」は，来館者からの申し込みがあれば，展示についての解説を美術館側が作成するものである。準備には 3 週間を要するため，早くからの申込みが必要である。手話による展示の解説を来館者が依頼する場合は，美術館側は準備に 2 週間を要するとしている。

難聴のある来館者に対して，「Gallery Talks and Exhibition Tours with FM Assistive Listening Devices」と呼ばれるプログラムをおこなっている。これは，学芸員や美術作品の保存修復技術者，エデュケーターなどの専門家とともに，展示室で美術に関する作業に従事するプログラムである。

金曜日の午後や土曜日の午前は，月曜日から日曜日の早朝と同じ程の申し込みがある。「Gallery Talks」はギャラリー534でおこなわれており，この参加はエントランスホールで申し出ることができる。

「Conversations with Curators, Conservators, and Educators with FM Assistive Listening Devices」は，学芸員や美術作品の保存修復技術者，エデュケーターなどの専門家とともに，彫刻のおもしろさについて話すプログラムであり，週 1 回開催される。

「Artists on Art works with FM Assistive Listening Devices」は，毎月一度金曜日の午後に，メトロポリタン美術館の収蔵品についての解説を作者がおこなうものである。45名限定であり，会場であるギャラリー534で30分前に整理券が分配される。上記の 3 つのプログラムは，無料で参加することができ，予約は不要である。個人での来館者のみ参加可能であり，グループでの参加は不可である。

次に「Short Course-Making Tapestries in the Renaissance」は，メトロポリタン美術館の専門家とともにタペストリーを制作し，「Pieter Coecke

van Aslst and Renaissance Tapestry」という展示と共同で事業をおこなうというものである。このプログラムは，メトロポリタン美術館の美術室やRuth and Harold D. Uris センター（児童や生徒，教師，学生などが博物館での体験をおこなうために設置された教育普及活動をおこなう施設）でおこなわれている。料金は150ドルであり，制作スペースに制限があるため，予約が必要である。詳細は，メトロポリタン美術館のホームページ及び電話で確認することができる。

聴覚障害のある来館者に対しては，「Met Signs Tours in ASL」と呼ばれるプログラムがある。これは，展示作品の解説をおこなうプログラムであるが，通訳には手話が使用され，音声は用いない。このプログラムは，無料で参加することができ，予約は不要である。

「Met Signs in the Studio in ASL」は，絵画などの美術作品を制作するワークショップである。通訳には手話が使用され，音声は用いない。メトロポリタン美術館の Ruth and Harold D. Uris センターでおこなわれている。このプログラムは，予約が必要であるが，無料で参加することができる。

「An Evening of Art & ASL」は，展示作品の解説をおこなうプログラムであるが，通訳には手話が使用され，音声は用いない。「Gallery talk」の手話での解説についての案内は，メトロポリタン美術館のホームページ上のカレンダー及びメールで確認することができる。上記の３つのプログラムは，個人での参加のみ受け付けており，団体での参加は不可である。プログラム中に手話をおこなうのは，聴覚障害のある者である。このプログラムや手話についての意見があれば，電話やメールで相談することができる。

（5）知的・発達障害のある来館者への配慮について

自閉症スペクトラム障害や学習障害などの発達障害のある来館者に対して，「Discoveries」と呼ばれるプログラムをおこなっている。このプログラムは，常設展示や特別展示を少人数のグループでまわり，鑑賞するもので，障害特性に合った鑑賞方法が取り入れられている。少人数のグループの中には学芸員やエデュケーターが入り，ともに鑑賞したり，作品についての説明をおこなったりする。展示物をさわって手の感覚で感じたり，展示物について話したり，鑑賞後にスケッチやロールプレイングをしたりするものである。このプログラムの日程は，「Access Calendar」で確認することができる。プログラムの詳細は，メトロポリタン美術館のホームページ上で閲覧することができる。参加は無料だが，場所に制限があるため，予約が必要である。

このプログラムの特徴は，発達障害児者が家族や友人とともにプログラムに参加することができる点である。家族や友人とともに参加することによって，発達障害児者の緊張が和らぎ，初対面の学芸員やエデュケーターとも会話することができるような環境となっている。次に，学芸員やエデュケーターとの対話を通して，発達障害児者の展示作品への理解が促され，展示作品について質問する環境が整っている点である。これらの工夫によって，発達障害児者は展示作品をみるだけでは知ることのできない作品の背景や歴史を知り，発達障害児者が能動的に展示にかかわる機会となるといえよう。

メトロポリタン美術館では，障害のある人の団体に対しても，生涯学習の機会を保障している。美術館を訪れる障害のある人の団体に対して，その団体の必要とする内容や目的，料金を考慮したプログラムを作成している。また，障害や体調が理由で美術館に訪れることができないニューヨーク在住の学校や機構に所属する人に対し，エデュケーターが美術館から学校や機構へ出向くといったプログラムを提案している。特別支援学校や特別支援学級に対しては，障害について専門的に学んだボランティアが美術館での鑑賞の支援をおこなっている。学校団体が美術館での鑑賞を希望する際には，メトロポリタン美術館のホームページまたは電話で申し込むことができ，事前に学校側の希望を伝えることを美術館が推奨している。

（6）その他のプログラムについて

メトロポリタン美術館では，認知症患者を対象に，「Met Escapes」と呼ばれるプログラムがおこなわれている。これは，認知症患者が，学芸員との対話や絵画制作などの活動をおこなうものである。このプログラムは，予約が必要であるが，無料で参加することができる。また，認知症患者の介助者を対象に，「Sights & Scents at The Cloisters Museum and Gardens」と呼ばれるプログラムがおこなわれており，メトロポリタン美術館の展示や庭園を無

料でみてまわることのできるものである。予約やこのプログラムについての案内は，電話やメールで得ることができる。

Ⅳ．まとめ

本視察の結果を踏まえ，障害児者に対する特色ある配慮の現状と障害のある来館者への情報保障という観点から，以下の２つの視点で障害のある来館者，とりわけ知的・発達障害のある来館者への合理的配慮のあり方を述べる。

（1）視覚以外のさまざまな鑑賞方法について

今回視察をおこなった博物館では，視覚以外にもさまざまな感覚を使用した鑑賞方法がとられていた。さわることを鑑賞方法の一つとしている博物館や，視覚障害や聴覚障害，知的・発達障害などのそれぞれの障害種別に，音声ガイドや学芸員のギャラリートークをおこなう博物館がみられた。障害児者の興味関心の拡充には，物的な配慮の必要性に加え，展示の解説を望む人，落ち着いた環境での鑑賞を望む人，展示に関するワークショップなどの人とのかかわりの中で展示を楽しむことを望む人など，さまざまなニーズがあることが考えられる。今回視察をおこなった博物館では，来館者の特性を考慮したさまざまな鑑賞方法の選択肢を用意している。

しかしながら，提供する鑑賞方法によって，学芸員が来館者に体験してほしいと願う内容には博物館ごとに差異がみられた。吹田市立博物館では，「さわる」ことによって，来館者がモノの歴史や背景を知り，複合的な情報や感動を得ることを目的としていた。国立民族学博物館では，展示物をさわることで，モノの「形状，質感，機能」を知ることができるとし，来館者がモノと対話することが重要であるとされていた。メトロポリタン美術館では，学芸員やエデュケーターが来館者とともに展示を鑑賞し，来館者が学芸員に展示作品について質問したり，解説を受けたりすることで展示物への理解が促されていった。３館に共通するのは，実物をみる，実物にさわるといった，来館者とモノとの直接のかかわりがあることである。たとえば，視覚障害児者にとって，他者がみた絵画を説明されることでは十分に鑑賞したとはいえない。そのような場合に用意されているのが，３館ともにそれぞれ発行している「絵画を触図化し立体的に示した本」である。これは，特別展示の展示物や世界的に価値のある絵画などが無色透明な紫外線硬化樹脂インクの点字や立体触図を用いて立体的に描かれ，必要に応じて絵画の細部を拡大して示してある本である。この本は，視覚障害のある来館者の絵画の鑑賞に有効であるといえるが，値段の高さから数多くの冊子を用意することができないのが現状である。

また，展示物を「さわる」といった行為をおこなう背景や理由にもさまざまあることが考えられる。みることで鑑賞できるならばさわらなくてもよいとする（数ある鑑賞方法の選択肢の一つである）のか，さわるからこそわかることがあるといった考えにより，さわることのできる展示物はすべてさわる（さわることでしか得られないものがある）べきなのかといったスタンスの違いによっても，学芸員が博物館に用意する資料の種類が異なってくるであろう。

国立民族学博物館とメトロポリタン美術館で異なるのは，作品を鑑賞する際に，モノと来館者の１対１の対話であるか，モノと来館者，学芸員の３者による対話であるかの違いである。後者の鑑賞方法をとる際には，学芸員の感覚が来館者への押し付けにならないように配慮する必要があるといえる。そして，さまざまなニーズのある来館者が，そのときどきによって鑑賞方法を選択できることが理想的であろう。また，従来博物館は「静かな場所，暗い感じ，日常生活から隔離された場所」（駒見，2003）といった印象があることがいわれてきていたが，静かな博物館がすべてではなく，作品についての会話がしやすい雰囲気もまた重要であると考えられる。

（2）日米での障害のある来館者に対する配慮の違い

日米の博物館でおこなわれている障害のある来館者に対する配慮の違いとして，日本でとられている鑑賞方法は，視覚障害，聴覚障害，知的・発達障害などの障害種をわけることなく，すべての来館者を対象としておこなわれていた。一方で，メトロポリタン美術館でおこなわれている鑑賞方法は，視覚障害，聴覚障害，知的・発達障害など，障害種や来館者の特性によっておこなう展示方法を明確にわけ，鑑賞方法がさまざまあることを来館者にわかるかたちで明示していた。これらの違いの背景には，日本が2014年に批准した「障害者の権利に関する条約」

があるように，日本で障害児者に対する合理的配慮が考えられ始めたのが最近であること，日本の博物館とメトロポリタン美術館の来館者数の違いなどがあると考えられる。また，日本とアメリカでは文化的，社会的背景が異なり，アメリカでは障害があることを多様性の一つとして考えているために，障害児者が公共施設を利用したり生涯学習の機会に参画したりしやすい雰囲気や社会の理解があることが考えられる。さらに，アメリカには博物館のアクセシビリティや障害のある来館者の対応を専門とし，博物館の教育普及活動をおこなう役職としてエデュケーターが存在する。エデュケーターは，展示を企画立案することはなく，教育プログラムを提案することが専門である。さらに，学芸員とエデュケーターは対等な立場で博物館運営にかかわり，それぞれが専門性を発揮することができる環境となっている。一方で日本は，学芸員が展示の企画立案や実行，教育プログラムの実施のすべてを担っているのが現状である。アメリカと日本では，教育普及活動の企画や運営，広報にかけることのできる人員や時間に差が生じている。これらのことから，子どもや障害のある人など，自ら博物館に訪れにくいと考えられる人々に対する必要な配慮をおこなうまでに至っていないという現状があるといえよう。

しかしながら，日米がそれぞれおこなう配慮に是非はつけられない。日本の博物館では，障害種によって対象をわけた鑑賞の機会は設けられていなかったが，日本で障害があることをカミングアウトすることによって受けられる配慮の量や質との兼ね合いを考えると，対象者がわかれていることによって，さまざまある鑑賞の機会に参加しにくいこともあると考えられる。日本のように対象者が限定されていなければ，だれもがさまざまな展示を楽しむことができるともいえよう。

ただ，日本で先進的な鑑賞方法の取り組みをおこなっている博物館でさえも，障害のある来館者への鑑賞の際の配慮や情報保障のあり方としては，主として視覚障害のみしか想定されておらず，アメリカのように知的・発達障害児者を対象とした鑑賞の機会はほとんど検討されていない。発達障害児者の中には，特定の領域について深い興味があり，深い知識欲をもっている者もいる。とりわけ発達障害児者にとっては，学校での学習に満足できず，専門的な学びや楽しみが得られる博物館が，彼らの興味関心を満たす場ともなりうる。そのような観点から，博物館は，彼らの興味関心を満たす場となりうる鑑賞方法や取り組みを検討する必要もあるといえる。

さらに，さわる展示などの特色のある展示をおこなっていなくとも，来館者が必要のある際に博物館側に申し出ることで，必要な配慮を受けることが可能となることは現状として期待される。

メトロポリタン美術館での取り組みは，さまざまな障害種への科学的な理解が博物館側や来館者の中に進んでいるからこそ可能になると考えられる。さらに，障害のある来館者に対して，来館者側の意見や要望をたずねる機会を積極的に設けている。この点は，日本でも生かすべき点であると考えられる。日本では，博物館学芸員が障害児者の特性を把握しきれておらず，具体的にどのような配慮をすればよいのかがわからない者も多く，それを知る場が少ないこともいわれている。研修などで障害についての科学的な理解を得，障害児者にとって生涯学習や余暇といった観点から配慮がおこなわれることはあたり前のこととして対応を考え，個々の来館者にあった鑑賞方法を今後熟考していくことが，日本における課題といえるだろう。

謝辞

本調査では，吹田市立博物館学芸員　五月女賢司氏，大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立民族学博物館准教授　広瀬浩二郎氏，The Metropolitan Museum of Art Curator Rebecca McGinnis 氏をはじめとする多くの博物館関係者の皆様から多大なるご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

附記

本研究は平成25年度富山大学大学院研究推進事業にておこなわれた。

本論をまとめるにあたり，実地調査時ならびに原稿執筆時において，実名による博物館の情報公開について，各博物館の関係当局より承諾を得ている。

引用文献

駒見和夫（1995）博物館の開放―発達障害をもつ人たちに対する視点―．博物館学課程年報，6，55–69.

駒見和夫（1997）バリアフリー博物館への指向．

博物館学雑誌，22（1・2），5–15.
駒見和夫（1998）博物館観覧者における心理的負担の一検討．博物館学課程年報，8，59–70.
駒見和夫（2003）博物館における娯楽の役割．和洋女子大学紀要文系編，43，23–36.
小山修三（2012）博物館だより．吹田市立博物館.
広瀬浩二郎（2012）さわって楽しむ博物館ユニバーサル・ミュージアムの可能性．青弓社.
財団法人日本博物館協会（2005）誰にもやさしい博物館づくり事業バリアフリーのために．財団法人日本博物館協会.
水内豊和・菊池加奈（印刷中）博物館における障害者に対する合理的配慮の現状と配慮の必要性に対する博物館学芸員の意識.

（2015年５月18日受付）
（2015年７月13日受理）